



Title	後漢王朝崩壊過程の研究
Author(s)	上谷, 浩一
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/1460
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	上谷浩一
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第18301号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	後漢王朝崩壊過程の研究
論文審査委員	(主査) 教授 青木 敦 (副査) 三重大学教育学部教授 東 晋次 教授 片山 剛 教授 荒川 正晴

論文内容の要旨

本論文は、最初の中華王朝である秦および前漢、また貴族制文化の栄えた六朝研究の狭間で従来やや等閑視されがちであった後漢王朝の政治過程を再検討することによって、中国「古代」の政治構造解明を目指すものである。

序論では、これまでの研究における後漢政治過程観が、外戚と宦官とが交替で専権をふるったという「戚宦交替専権論」、および宦官と外戚を「濁流」と批判した「清流派」官僚が弾圧されていたという「清濁二分論」に偏っている点、これが後漢史研究の基礎を提供する『後漢書』の著者范曄の観点に影響されている点を指摘し、これらを再検討することを本論文の目的とすることが表明される。

第一章では、後漢王朝が豪族連合政権と見られるにもかかわらず、劉秀(光武帝)が地方豪族勢力から距離を置かれていた点に着目し、河北における豪族勢力との提携の実態が把握される。そして確固たる支持基盤の欠如から、むしろ農民反乱集団と合流・離脱することで豪族勢力の核となり、地方政府掌握に成功した後漢王朝初期の姿が導き出される。

第二章の出発点は、前漢が外戚王莽に篡奪されたにもかかわらず、後漢ではなぜまた外戚専権が再現されたかという疑問である。これに対しても前章での検討が引き継がれ、外戚専権は決してよく言われる「迂闊」などではなく、確固たる基盤を持たずに勢力均衡の上に成り立っていた皇帝権力が、結局外戚を中心とした総与党化現象を招いたことが明らかにされる。さらにその過程で明帝による過度の統制への反発が功臣勢力の統合をもたらしたことや、それに対抗する和帝は新興「儒家官僚」と提携したこと、および最有力の外戚梁氏と「儒家官僚」の接近がみられたことなどが導き出される。

第三章では、中期の和帝・安帝期の政治が検討される。「延平元年七月庚寅勅」が精細に分析され、幼少の皇帝が続き皇帝権力不在であったとされてきた後漢中期においても、積極的な自然災害対策や地方行政刷新策が推進されていたと指摘する。その背景として、深刻な水旱災の打撃、さらに地方長官ポストが中央勢力の集財機関となり、豪族の請託も激しかった状態が確認される。そして、次の課題として、刷新策を担った官僚たちの実態解明が導かれる。

第四章では、上記の地方刷新の和帝親政期から鄧太后臨朝称制期への継承は、これを推進した刷新派官僚集団によって実現されたものであり、刷新運動が彼ら「儒家官僚」の自覚を高め、党錮事件につながると論じられる。また、従来の研究では「礼教派」「刷新派」「清流派」といった表現が用いられてきたが、これは儒教を基礎とする官僚集

団を、政治刷新を志向し、更には皇帝権力とも衝突してゆく過程に沿って、時系列的に切り取った呼び名に過ぎないとの結論が導き出される。

第五章では、従来「儒家官僚」と宦官の衝突と見られてきたこの事件の関連資料が再検討され、宦官は決して事件の勝利者とは考えられず、その本質は官僚と皇帝の衝突であることが示される。当時、「儒家官僚」を登用すべきであるという声が高まっていたが、それに加えて李雲が皇帝を批判してこれを激怒させるなどの状況があった。それが大規模な「儒家官僚」、太学生への弾圧へと発展したと論じられる。またこれとともに、「儒家官僚」が皇帝批判を行うようになった背景として、儒教イデオロギー・在地社会の危機的状況・当時の政治過程の3点が示される。

第六章は、「西園軍」を靈帝の愚行ではなく、積極的な軍制改革であったとする最近の研究動向を受け、その設立事情、およびこれが何故後漢王朝を崩壊させる「中平六年の政変」へと結びついたかを検討する。ここでは、宦官の役割が重視されながら、設立段階では外戚何進が中心であり、靈帝はその指揮を皇嗣問題から蹇碩にゆだね、これが混乱を助長させたことが明らかにされる。

第七章は、これも靈帝の思いつきで創設した芸術学校だと考えられてきた鴻都門学が、彼の進めてきた後漢王朝の改革の一環であり、新たな官僚養成機構たらんとしたものであったことを論じる。数少ない鴻都門学関係の史料を慎重に検討しつつ、その出身者が皇帝の側近官たる尚書や侍中に配置されていることなどから、靈帝の意図が実務能力を重視するものであり、それは後の曹操の「唯才」主義に引き継がれる、と展望する。

結論は、後漢政治史上の上記の諸論点を踏まえて、皇帝権力はその前期（光武・明・章）においては建国の功臣の相互掣肘の上に乗る、中期（和・安）においては台頭してきた「儒家官僚」と結びつき、後期（順・桓・靈）には次第に「儒家官僚」と衝突しつつ直属の権力機関設置を志向するようになってきたという流れを整理し、後漢政治史の再考が必要であると結ぶ。

論文審査の結果の要旨

中国で、簡牘などの新史料の発見が相次ぐ中であっても、政治史研究は文献史料分析を主とし、なかんづく正史たる『漢書』『後漢書』に大部分を頼らざるを得ない。しかも、漢代史研究はそれら限られた史料を根拠として、これまで幾たびも吟味され、極めて密度の高い研究が行われてきた。しかしながら、その歴史観は当然ながら、『漢書』の著者班固、また『後漢書』の著者范曄の史観を引き継がざるを得ず、その状況は六朝以降、清朝考証学ばかりか、現代に至るまで続いていると言える。

このような研究状況の中で本論文は、范曄の認識そのものである「戚宦交替専権論」、および「清濁二分論」に立脚した後漢政治過程理解を相対化する。そして従来の「礼教派」「刷新派」「清流派」というカテゴリーは、儒教教養を身につけて官界に進出した官僚たちを、時系列で切り取ったそれぞれの段階の姿に過ぎないとして、これを「儒家官僚」として概括し、その動きを外戚・宦官との対抗関係においてではなく、むしろ外戚・宦官と結びつつ皇帝権力と対抗関係にあったと論じる姿勢は、後漢政治の根本を問い直そうとする野心的なものである。

その結果、本論文は従来看過されがちであった、初期・中期・後期という後漢各時期の間に明白に見られる権力関係の変遷を明らかにし、さらに史料が極めて少ないところからこれまで殆ど研究されていなかった後漢末の西園軍や鴻都門学をも、官僚に対する皇帝の権力基盤強化の流れから解釈しようとする構想力は、卓越したものである。

もとより課題も残されている。「儒家官僚」の主たる出身母胎たる豪族階層の実態については、本論文の主題ではないこともあり、その部分の考察は必ずしも充分とは言えない。また、西園軍や鴻都門学の史的意義についても、次の曹魏政権への展開との関連の下に、さらに明確化する必要がある。しかしながら、後漢時代二百年の政治過程を、「儒家官僚」と皇帝権力との関係を軸に、従来にない独自の論理で解き明かしたその成果は、後漢政治史の研究水準を引き上げることに大きく寄与するものであると評価できる。よって審査の結果、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。